

頭註
新葉和歌集

著 順 忠 上 村
補 吉 太 田 品

集 歌 和 葉 新 註 頭

版 社 造 改

(長谷部製本)

昭和十一年八月四日印刷
昭和十一年八月八日發行

頭註 新葉和歌集

定價金貳圓五拾錢

校訂者 品田太吉

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 青野仙吉

東京市芝區田村町四丁目二番地

發兌 改造社

東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替東京 八四〇二番
電話 芝(43) 白 一一二四番

序

言ふまでも無く、人の心は時代の影響を受ける。従つて、人の心の聲である詩歌は、時代の影響を受ける。盛時の詩歌に泰平の氣象があり、亂世の詩歌に沈痛の調あるは、自然の勢と言はねばならぬ。神武天皇の卷の御製には、士卒をばげまし、軍旅をねぎらひ給うたる中に、建國の御氣魄が溢れて居る。壬申の亂は人麿黑人等の歌人の胸に宿つて、痛切なる響を遺して居る。天平の盛時には、他の藝術の美と相並んで、千古不朽の歌集を傳へ、延喜の治世には、溫雅なる撰集が選ばれた。平氏の滅亡は、平家物語に百首に近き悲哀の作を傳へ、また女歌人右京大夫を生んだ。承久の亂に當つては、三上皇の御製に、痛憤の御意を托し給へるものが多い。元龜天正前後の武士の作には、所謂武士道の眞髓を發揮したものがある。幕末當時の志士の作を見ると、國を憂へ君を思ふ情の溢れてをらぬ歌は

一首も無い。維新以前の時勢が、志士を驅つて熱烈なる歌を成さしめ、同時に回天の大事業を成さしめたのである。要するに、詩歌は時代の影響を受けるものである。此の點より見れば、詩歌は時代を側面から寫す鏡と謂つても可い。

ここに、吉野朝時代に撰ばれた新葉集がある。元來此の時代は、文學上に於いても亦、暗黒を極めた時代である。然るに、此の時代の暗黒を照破する二部の著作があつた。それは、新葉集と神皇正統記とである。

如何にして新葉集は撰ばれたか。當時北朝方では勅撰集が出たが、吉野朝方の歌は採らなかつた。その爲めに、當代第一流の歌人であらせられた後醍醐天皇の皇子宗良親王は、撰集を出さうとせられたところ、勅旨に依つて勅撰集に准ぜられたのである。かかる事情のもとに編纂せられた新葉集が、最も多く時代の影響を受け、最も克く時代を反映するものであることは、言ふまでも無い。

此の新葉集の歌と、維新以前の志士の歌とには、最もよく我が國民の特色を發

露し、最も人々を感動せしむる作がある。新葉集を取つて一首を高唱すると、切つて離れた弓絃の高鳴る響が聞える。馬上の武士の草摺に觸れて錚鏘たる佩劍の響が聞える。更に瞑目して當時を想像すると、御簾あらはに板敷寒き行宮の夜、山風に瞬く燈火の下に侍して、もとの都にかへさざらめやと憤り歌つたおもかげが現はれる。皇事に瘦盡せる白髮の老淮后が、敵地深き孤城の一室に史筆を執るさまもうかぶ。新葉集は熱烈の作に富んで、浮華な調が無い。彼の新勅撰集以後の撰集に對して、異彩を放つて居る。ある意味に於いては、萬葉集より直ちに新葉集ありとも言ひ得べく、辭藻に於いては相似ざれども、其の眞髓は同一であるといへる。

以上は新葉集に就いて、かねて自分の懷抱してをる意見である。しかも此の新葉集には、古來註解の書が乏しい。纔にある村上忠順翁の標註は、はやく刊行されたが、今は容易に讀書子の手に入り難い。

ここに品田太吉翁は、現代に於ける篤學の老學者であつて、數十年間孜々として、吾が國文學の爲めに筆を執つてをられるが、今年喜壽を迎へられた記念にとて、かの標註に増註を加へて、世に公にされることとなつた。翁にして此の書を出ださるる、まことに其の人を得たと言ふべきである。

翁を知ること數十年の久しき予は、喜びて此の序詞をしるすと云爾。

昭和十一年七月

佐 佐 木 信 綱

○古事紀曰 天地初發之時○神代紀一書曰 天地初判

○新古今集序曰 倭歌は昔あめつちひらけはじめて人のしわざいまだ定まらざりし時葦原の中つ國の言のはとして云々○新古今集序曰 理世撫民之鴻微云々

○新撰字鏡曰 媒妁也奈加太豆

○拾遺集、いづれをかしと思はむ、みわの山ありとしあるは杉にぞありける

○古今集雜下、神無月時雨ふりおけこれ○萬葉集、名におふ宮のふり事ぞ遺集、後拾遺集、古今集、後撰集、拾遺集、後拾遺集、金葉集、詞花集、拾遺集、後拾遺集、新勅撰集、續後撰集、續古今集、續拾遺集、續後撰集、續玉葉集、續千載集、續後拾遺集、以上十七集

○國號考曰 秋津島は古事記に大倭帶日子國押人命坐高城室之秋津島宮治天下也と見え書紀にも此御宮に二年冬十月遷都於室ノ地是謂秋津島宮と有りてものと此孝安天皇の都の地名なりかりの神武天皇の猶如三姉妹之聲貼と詔へりしは則此地の事にてかの大詔より起れる名なり腋ノ上も味間丘も室も皆相近き所にて大和國葛上郡なりさて孝安天皇の百餘年久く敷坐りし京師の名なるから秋津島倭とつづけていひ下なるもの倭にひかれてつづけて天ノ下の大號にもなれる事は師木島と全く同例

新葉和歌集序

あめつち開けはじめしより、あしはらの代々にかはらず、世ををさめ民をなで、ところざしを言ひ、心をなぐさむるなかだちとして、わが國にありとしある人、あまねくもてあそび、さかりにひろまれるは、ただこの歌の道ならし。これによりて、ならの葉の名におふみかどの御時より、正中のかしこかりしおほむ世に至るまで、えらびあつめらるる跡、十あまり七たびになむなれりける。そのあひだ家々にあつめおけるたぐひ、又そのかずを知らざるべし。しかあるを元弘のはじめ、秋つしまのうち、浪の音しづかならず、春日野のほとり、とぶ火のかげしばしば見えしかど、ほどなく亂れたるを

なり○古今集 かすが野のとぶひの
野守いでて見よ今いくかありて若菜
つみてむ○續日本紀曰 元明天皇和
銅五年正月底河内國高安、烽一始
置高見、烽及大倭國春日ノ烽、以通二
平城一也
○孟子曰 予豈好辯哉予不得レ已
也天下之生久矣一治一亂云々
○晉書曰 元帝姓牛名徽字景文瑯琊
恭王之子宣帝曾孫永嘉元年與西陽
王承等五王渡江父老襄、懼而歸之
遂據有建業二而都焉是爲東晉○十
八史略便蒙云 都江東建業故曰東
晉一後改建業爲建康一避愍帝諱一
也
○日本書紀曰 天照大神乃賜天津
彦々火瓊々杵命、八坂曲玉及八咫鏡
草薙劍三種寶物云々○此集賀部に
後村上院三種の海波もをさまるしる
しとて三のたからを身にぞつたふる
○萬葉集七いせの海のあまのしまつ
があはび玉とりて後もか戀のしげけ
む○淺香山かげさへ見ゆる山の井の
あさき心をわがもはななくに
○史項羽紀云 項王心懷レ思欲東歸一
日富貴不歸故郷一如衣レ襦夜行誰
知之者
○前漢書朱買臣傳云 上拜朱買臣會
稽太守上謂買臣曰富貴不歸故郷
如衣レ襦夜行○三代の帝は後醍
醐天皇後村上院天皇後龜山天皇を申奉
る
○千載集序曰 和歌の浦の道にたづ
さひては七十のしほにもすぎ云々

をさめて、ただしきにかへされしのちは、雲のうへのまつり
ごと、更に古きあとにかへり、あめの下の民、かさねてあま
ねき御めぐみをたのしみて、あしきをたひらげ、そむくをう
つ道まで、ひとつにすべおこなはれしかど、一たびはをさま
り、一たびは亂るる世のことわりなればにや、つひに又むか
しよろこしに江をわたりけむ世のためしにさへなりにたれ
ど、ちはやふる神代より、國をつたふるしとなれる三く
さのたからをも受けつたへましまし、やまともろこしにつけ
て、もろもろの道をもおこし行はせ給ふおほむまつりごとな
りければ、伊勢のうみの玉も光ことに、あさか山のことの葉
も、色ふかきなむ多くつもりにたれど、いたづらにあつめえ
らばるる事もなかりけるぞ。ぬひものをきて、よるゆくたぐ
ひになんありける。

○散木集 七十にみちぬるしほのはま
 ○月詣集に顯昭、七十にみちぬるしほを待つて千年つむべき舟よそひせり
 ○史高祖紀云、高祖曰公知其一未レ知其二夫運籌策帷帳之中決レ勝於千里之外吾不レ如三子房
 ○三衣は僧伽梨、僧多羅僧、安陀會なり
 ○翻譯名義集云一僧伽梨ハ梵語、華言レ合又云重謂割之而合成也二僧伽羅僧ハ華言上著衣即七條也三安陀會ハ華言中宿衣謂宿睡時常近レ身衣也○萬葉十一卷に湊入の苜わけ小舟さはり多み我思ふ君にあはぬ此ごろ○且は字書に不定之辭とも姑且也とも見ゆ
 ○新拾遺集 いつまでと思ふにつけて老が身はなぐさむほどのあらましもなし○元弘元年より弘和元年に至りて五十一年也世はみつぎは上なる三柱也
 ○淵鑑類函曰 瑤臺玉臺築爲瓊宮瑤臺碑二百姓之財○禮樂志曰 遊閭閻觀玉臺
 ○玉葉集に上東門院、かげだにもとまらざりける雲の上をたまのうてなと誰か言ひけむ○千載集序 瓦の窓柴の庵の言の葉をもちらす事なし
 ○論語曰子曰君子不レ以レ言舉人
 ○此集春上に國量、咲きぬべき枝を以レ人擬言

ここに吳竹のその人かずにつらなりても、三代の御門につかへ、和歌の浦の道にたづさひては、ななそちのしほにもみちぬるうへ、かつことを千さとのほかにさだめし昔は、野邊のくさ、ことしげきにもまぎれき。ころを三の衣の色にそめぬる今は、あしまのふねのさはるべきふしもなければ、かつは老のころをもなぐさめ、かつはすゑの世までものこさむため、かみ元弘のはじめより、しも弘和の今にいたるまで、世は三つぎ年はいそとせのあひだ、かりの宮にしたがひつからまつりて、をりにふれ時につけつつ言ひあらはせることの葉どもを、玉のうてな金のとのより、かはらのまど、なはのとぼそのうちにいたるまで、人をもちて事をすてず、えらびさだむるところ、千うた四ももちあまりはたまき、名づけて新葉和歌集と云へり。花をたづね郭公をまち、月をながめ雪を

葉に今日はしてあすも外山の花やた
 づねむ
 〇又夏に前内大臣、今よりやねぬ夜
 重ねて時鳥しのぶころの初音また
 まし
 〇秋下に妙光寺内大臣、ながめても
 我世ふけぬとかなしきは四十にかか
 る山のはの月
 〇冬に後村上院、名をとへばつかさ
 くも心しつくるにのけるきけさ
 〇離別に同院、わかれつる袖にかけ
 けりすずか川八十せのたきにおつる
 白玉
 〇旅に長親母、枕ゆふ野原のくきの
 つゆの上にかりね争ふ月のかげかな
 〇神祇に宗良親王、五十鈴川その人
 なみにかげずともただよ水のあき
 れとは見よ中院入道一品、石清水き
 よき流をたのむよりにごらじとこそ
 思ひそめしか
 〇老子曰 和其光 同其塵 〇涅槃
 經曰 爾時世尊娑羅樹下三昧實狀云
 々南入涅槃已其娑羅樹下三昧實狀云
 樹南北二双合爲一樹垂覆寶林蓋覆如
 來其樹即時慘然變白猶如白鶴〇釋氏
 要覽曰 鹿苑又名三鹿林一在波羅奈
 國佛成道初轉法輪度橋陳如等五
 比丘處〇此集雜中在新待賢門院吳
 竹丘ふく世もあらじものゆゑに身の
 うきふくはなげかざるもな〇古今集
 長歌えふのみなれば猶やまず思ひ
 なればをえふ密勘云 基俊公は閻浮の身
 ば思はじと思へどかなはずとこそすれ

もてあそぶよりはじめて、花の都にわかれをしみ、草の枕
 にふるさとを戀ひ、いすず川いはし水のながれをくみては、
 光をやはらげて塵にまじはるちかひをたふとび、鶴のはやし
 鹿の園の跡をたづねては、まよひをのぞきて、さとりをひら
 くむねをこひねがふ。あるはかたいとのあひ見ぬ戀に思ひみ
 だれ、あるは吳竹のうきふししげき世をなげきても、恨をか
 こち思ひをのべ、えふのさかひのつねならぬことわりをかな
 しみ、また百敷のうちにしては雨露のめぐみをほどこし、や
 しまのほかまでも浪風のおとしづかにして、むしろ田の鶴の
 よはひにあらそひ、すみよしの松の千とせをたもたせ給ふべ
 きすべらきのおほむ光をいはひたてまつるにいたるまで、こ
 ころ内にうごき、こと葉ほかにあらはれて、六くさのすがた
 にかなひ、一ふしのとるべきあるをば、これをすつる事なし

〇此は普通に心えがたき事に侍と傳
 〇説有りところ申されけめ
 〇催馬樂席田 むしろだのいづき
 川にすむつるの千とせをかねてぞあ
 そびあへる云々
 〇此集賀に前關白左大臣、千代を又
 かさねて契れみゆきして二たびなる
 すみよしの松
 〇毛詩序曰 情動於中而形於言
 云々故詩有三義焉一曰興二曰賦三
 曰比四曰興五曰雅六曰頌
 〇續千載集 あら玉のことしもかく
 てこゆるぎのいそぢの波を袖にかけ
 つゝ 〇和名鈔云 相模餘綾郡餘綾(與
 呂木)郷
 〇後撰に貫之、はゝそ山みねの鼠の
 風をいたみふることのはをかきぞあ
 つむる
 〇夫木に内大臣、和歌の浦はおほく
 の人の筆の海沖にもへにももしほか
 くらし
 〇新古今に家長、もしほ草かくとも
 つきじ君が代のかずによみおくわか
 の浦波
 〇續紀二十、見可_レ咎事_レ和射奈世曾
 〇古今集序に世の中にある人ことわ
 ざしげきものなれば云々〇源氏夕霧
 卷にことわざしげきおのがじのい
 となみにまぎれつつ、玩弄をもしてあ
 そぶとよめり持遊の義也、幻卷に此
 宮ばかりをぞもて遊びに見奉り給ふ
 〇此集奥書に爰新葉集衆篇鏤金毎部
 飾_レ玉云々 敬感之餘所_レ被_レ撰_レ勅撰
 集_二也者論言如_レ此〇大日本史曰宗良

といへども、よものうみの浪のさわぎも、こよろぎのいそと
 せにおよべれば、家々のことの葉風にちり、浦々のもしほ草
 かきもらせるたぐひも、又なきにあらざるべし。
 そもくかくえらびあつむる事も、ただ苑のうちのわづかな
 ることわざなれば、あめのした廣きもてあそびものとならむ
 事は、おもひよるべきにあらぬを、はからざるに、いま勅撰
 になずらふべきよしのみことのりをかうふりて、老のさいは
 ひ、のぞみにこえ、よろこびのなみだ、たもとにあまれり。
 これによりてところくあらためなほして、弘和元年十二月
 三日これを奏す。おほよそ此道にたづさはらむ人は、いよ
 くなにはづのふかきころをさと、この時にあへらむと
 もがらは、あまねくしきしまの道ある御代にほこりて、春の
 花のさかゆるたのしみを四のときにきはめ、秋の夜のながき

昔撰_レ新葉和歌集_二後龜山帝勅準_二奉
 敕撰_レ弘和元年十二月重訂上之時年
 七十不知_二其所終_一
 ○或書云弘和元年十二月入道親王ノ
 宮新葉和歌集を撰して奏覽ありしが
 やがて勅撰になぞらへさせ玉ひける
 元弘元年より弘和元年の間南帝三代
 後醍醐院、後村上院、後龜山院、并
 月卿雲客男女諸官等の和歌此集に載
 させたまふ北朝の諸臣は載せずと云
 々其序も親王あそばしおかれし御年
 七十ときこえさせたまふ○中務卿宗
 良親王信濃宮とも上野宮とも井伊谷
 宮とも申奉る後醍醐天皇第三の皇子
 にて元弘三年に征東將軍に補し東國
 にましませり後年河内國山田莊に閑
 居まし_レ新葉集を撰びて奏せらる
 又終に井伊谷に隠れさせたまひ七十
 三歳にて薨じたまひぬ_{（葉）}
 ○古今集にきり_レすいたくな鳴き
 そ秋の夜の永きおもひは吾ぞまされ
 る○文選吳都賦云 露伴霜來
 ○古今集 わすられむ時しのべとぞ
 濱千鳥ゆくへもしらぬあとをとどむ
 る○蒼頡觀_二鳥跡_一始作_二文字_一○老子
 曰 天長地久天地所_二以能長且久_一者
 以其不_二自生_一故能長生

名を萬のとしにとどめつつ、露ゆき霜きたりて、濱千鳥の跡
 たゆる事なく、あめ長く土久しくして、神代の風はるかにあ
 ふがざらめかも。

頭註 新葉和歌集目次

目次	序		一
卷第一	春歌上		一
卷第二	春歌下		一九
卷第三	夏歌		三七
卷第四	秋歌上		五四
卷第五	秋歌下		七〇
卷第六	冬歌		八九
卷第七	離別歌		一〇九
卷第八	羈旅歌		一二七
卷第九	神祇歌		一二五
卷第十	釋教歌		一三五
卷第十一	戀歌一		一四三

卷第十二	戀歌二	一五
卷第十三	戀歌三	一七
卷第十四	戀歌四	一八
卷第十五	戀歌五	二〇
卷第十六	雜歌上	二二
卷第十七	雜歌中	二六
卷第十八	雜歌下	二七
卷第十九	哀傷歌	二七
卷第二十	賀部	二六
奥	書	三四

□序

佐佐木信綱……………一

□村上忠順翁の事蹟

深見愛子……………一

□新葉和歌集増註別記

品田太吉……………一

○新葉和歌集卷第一頭註

○大日本史云後村上天皇諱義良初名
憲良後醍醐帝第八子也母新待賢門院
夢抱日有身嘉曆三年生正平二十三
年三月崩于住吉殿二年四十一、葬于
觀心寺稱後村上院

○新續古今集に忠房親王、いづる日
の光やそらに匂ふらむ峰よりあくる
天のかぐ山

○大日本史曰 宗良親王十餘歳爲僧
名尊澄住妙法院叙三品爲天台
台座主尊澄養髮改名宗良稱上
野親王或信濃宮尋敕宗良爲中務卿
征東將軍云々

○新拾遺集に公宗母、あらはれてい
つ名に立たむせきもりのうちぬるひ
まのかずもつもらば

〔増〕伊勢物語に 人知れぬわが通
路の關守はよひよひとにうちも寝
ななん

○大日本史曰後龜山天皇諱熙成後村
上帝第二子也母嘉喜門院應永元年二
月上尊號曰太上天皇薨髮法名金
剛心三十一一年四月崩稱後龜山院

新葉和歌集 卷第一

春歌上

たつ春の心をよませ給うける

後村上院御製

出づる日に春の光はあらはれて年立ちかへるあまのかぐ山

千首歌よみ侍りし中に立春關を

中務卿宗良親王

御集

關守のうちぬるひまに年こえて春は來にけり逢坂の山

うへのをのこども題をさぐりて百首歌つかうまつりける

ついでに立春氷といふ事をよませ給うける

御製

○古今集に當純、谷風にとくるこほりのひまごとによりちいづる波や春のはつ花

○拾遺愚草 よしの山かすまぬかたの谷水もうちいづる波に春はたつなり

○續千載集に西宮左大臣、空にもや人はしるらむよとにも天つくもるをながめくらせば

○南朝皇胤譜云尊良親王後醍醐天皇第一之皇子母贈從三位爲子權大納言藤原爲世卿女延元三年三月六日於越前金崎自害

○後撰集に雅正、花鳥のいろをもねをもいたづらにものうかる身はすぐすのみなり○源氏物語桐壺卷云云なつかしうらうたげなりしをおぼし出づるに花鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなき

〔増〕後撰の花鳥は櫻と郭公なれども玉葉集春下に花鳥の色音もたえてくるる空の霞ばかりに残る春哉これは櫻と鶯なり

○類題歌集に基綱、むせかへり又こそこれ春來ぬと岩間の水のはまほしきに○千載集に國信、御室山谷にや春の立ぬらむ雪の下水岩たゝく也○才子傳云藤原爲忠者權中納言爲藤之第二子也觀應二年參于南山而爲三藏人頭二任三參議應安六年十二月十八日薨歳六十四其詞什見三代之撰集貞和百首等又新葉集多載三卿之歌是暫在南山之故乎

風わたる池の水もとけそめて打出づる浪に春や立つらん

百首歌よみ侍りける中に

冷泉入道前右大臣

九重の都に春や立ちぬらむあまつ雲ゐのけさはかすめる

建武二年内裏にて人々題をさぐりて千首歌よみ

侍りける中に春天象を

中務卿尊良親王

花鳥の色にもねにも先だちて時知るものは霞なりけり

右大臣に侍りけるととき家に三百番歌合し侍りけるに

溪餘寒といへる心を

關白左大臣

さえかへり又こそ谷に氷りぬれ高嶺にとくる雪の下水